

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On sort biography of Ebina Danjo

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 關岡, 一成, Sekioka, Kazushige メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/911 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



海老名彈正「自伝的略年譜I」について

成一岡關

はじめに

海老名彈正（一八五六—一九三七）関係史料は、夫人のみや子（一八六三—一九五一）を経て、長女の道子（一八九九—一九八八）が継承した。

一九七一年、同志社大学人文科学研究所のキリスト教社会問題研究チームに「海老名彈正とその周辺研究班」が設置され、資料収集が行われた。一九七二年に、二次にわたつて海老名道子所蔵の史料が整理されマイクロフィルム化された。史料は、日記・覚書、著作、書簡、写真など四一九点におよぶ膨大なものである。

海老名道子所蔵の原史料は、道子が生存中の一九八一年十一月に石川文化事業財団「お茶の水図書館」に寄贈された。『主婦之友』創設者の石川武美（一八八七—一九六一）が本郷教会で海老名から洗礼を受け、生涯にわたつて親密な関係についたからである。

一〇〇一年十一月に「お茶の水図書館」が移転縮小するのに伴い、同志社人文研に原史料の移管の申し出があり、一〇〇二年二月に、研究所の田中真人教授とともに筆者も同図書館でこの史料確認に立ち会うことができた。司書の話では、この史料が整理されていなかつたことや存在が限られた人にしか知られていなかつたこともあり、「お茶の水図書館」に保存されていた二十年間に、筆者が一九八五年一月に閲覧した以外には一件の利用があつたのみということであつた。

一〇〇二年二月下旬に、「お茶の水図書館」所蔵の原史料三八五三点が同志社人文研に寄贈され、同志社人文研は、海老名道子所蔵・海老名彈正関係史料をマイクロ・紙焼・原史料と全て揃えた。人文研では、これから二年をかけて史料の整理をするということなので、今後より利用しやすい史料として研究者に供されることと思う。

海老名自筆の自伝・回想録史料は十一点あるが、本稿では「自伝的略年譜注I」を取上げた。この年譜は、柳川での誕生から同志社学生時代の二十二才までの記述である。残念ながら枚数制限の関係で全体の三分の一程度を要約の形で掲載した。

安政三（一八五六）年

八月二十日（太陽暦では九月十八日）朝、剛堅で厳格な武士の父（平馬助）と剛堅で闊達有意の母（駒）の子供として誕生。

萬延元（一八六〇）年（四才）

この年の記念すべき出来事は、私の着の祝賀である。十一月と記憶して居る。祝賀の日、若頭・草履取・槍持の三

人を従者として、氏神・山王宮に参詣した。参詣の途中、ある足軽が私の前に恐縮して土下座した。神前に何と祈ったか記憶していないが、武士の覚悟を祈つたに違いない。

この時より、手習いを始め、読書を教えられたように記憶する。

文久二（一八六二）年（六才）

この年の冬、父は二合の米を持たせて、居合の道場に連れて行き、入門させた。帯刀する以上は、刀の抜き方を心得ておらねばならぬ、というのが父の主張であった。父は居合が堪能で、師範の資格があったという。

文久三（一八六三）年（七才）

この年の冬であつたと思う。一日、西風烈しく、みぞれが降り、私は茶の間で母の側に居り、火鉢の火に温まつていた。母は針仕事をしておられた。門外で魚売りの米吉のふれ声がした。母は、米吉は寒い日をしており、お前は火に温まつてゐる訳がわかるか、と言われた。わかりませんと答えた。母は言うて聞かせようと言つた。米吉は寒い日をして勤いて銭を取つて女房・子供を養つてゐる。故に戦が始まつたら、何処に逃げていてもよい。しかし、お前は、ご先祖様と殿様のお陰でこうして温まつて三度のご飯を食べているから、戦が始まつたら、お殿様の馬前で討ち死にするのだ、と。私は慄然として、皮膚に粟を生じた。私は死ぬために生きているのかと、愕然として覚悟を定めた。武士心は、この瞬間に生まれたのである。

元治元（一八六四）年（八才）

この年の暮れ頃であつた。一日遊ぶだけ遊んで暮れ方家に帰つた。母は、台所で煮物をしておられた。私は直ちにカマドの前に行つた。温まるつもりであつた。すると一冊折手本のようなものがある。黄色の表紙である。開いて見ると、

画が書いてある。論語・孟子などとは違う平仮名交じりで書いてある。金性とか土性とか書いてある。母に何の本ですかと尋ねると、運を見る本であると言われた。私は、運という言葉を始めて聞いたので、運とは何ですかと尋ねた。運とは、人の行く末、人がどうなるかを言うのである。お前の運を見てやろうと、本を取つて見られた。お前は若い時は苦労するが、年を取るに従い福になるという運である。苦労しても若い時なら良い、年取つて福であれば良い。

母様の運はどうですか、と尋ねると、私の運も良い運である。男子に生まれたら、擊劍槍術を以て天下に鳴り渡るのである。女子に生まれたので、台所で煮物をしているのであると言われた。私は男子に生まれた。母上の代りをしなければならぬと心中大奮起したのである。この大決心は母には言わなかつた。この時より、女子に対する同情と、母上の魂とが私の胸底に勃発して消滅しない。

慶應元（一八六五）年（九才）

五月十一日朝、母死亡する。私は早朝に起こされ針医者を呼びに行つた。門前でどれだけ呼んでも起きない。向かい側の主人が掃除に出ていたので、手伝つて呼んでくれたが起きない。四十分か一時間も呼んでも起きず、失望して帰つた。帰宅すれば母は死んでいた。

この朝より、私は全く変わつた。私は、悲哀の人となつた。この悲哀は重なり、また高くなつて、實に二十六才の結婚の日まで続いたのである。

母の実家は法華宗であり、海老名家は真宗であるが、母は黄檗宗の読経の声を愛し、死んだら黄檗宗の読経を聞きたいと言つていたというので、黄檗宗のお坊さんも呼ばれて仏前に読経して貰つた。夏時だったので、私は何時もお坊さんの背後より团扇であおいだのである。仮壇の茶水は、私が毎日取り替えた。

五十日間は門外に出なかつた。唯、墓参だけした。墓参の途中、決して傍目をするなど父に命じられ、これを守つた。

日夜の問題は、母は何処へ行つたかということであつた。墓中にいるというのは、実に心苦しく堪えられない。地獄極楽の絵画を見せられ、母が極楽に入つたとは保証できない。万人中一人ぐらいが極楽に行くとの話であつて、地獄に行つたと考へるべきであるが、そのように考へることはとても苦痛で堪えられない。

また隣家では、母の法事の際に大蛇が二匹、静かに読経を聞いていたと言う。一匹は母の姿であると言う。輪廻の話を聞かされる。實に堪えられない。ただ、お手伝いの女性から、奥様が生前私の魂は天に行くから恐れないようになると听说过いたと聞き、慰安と満足を与えられた。

秋より、藩校・伝習館に通学し始めた。

慶應二（一八六六）年（十才）

六月、父が長州征伐に出掛けた。父の鎧兜姿を見たのはこの時が初めてであつた。七月十三日より盆になつた。一夕、繼母が剣を抜き、蚊帳の周囲を廻る。不思議なことと思い理由を聞くと、実母が現れたと言う。何日もこれが続き、私の人生が暗く苦しいものになり始める。七月末か八月初旬に父は帰宅した。

慶應三（一八六七）年（十一才）

始業式の酒席で、寮長の笠間益三氏は酒を飲んでおられたが、私を側に引き寄せ、お前は有望である、卓越して居る。よく学問すると慥によくなると讃められた。この言葉を力としてさらに学問に励んだ。

明治元（一八六八）年（十二才）

この年は大変革の年で、伝習館も廢止となつた。しかし大伯父（伝習館・句讀師）の指導により学問を続け、素読な

ら四書五経、左伝、史記等は一通り出来た。父は学問をしなかつたので、家には書籍は一冊もなく、大伯父が藩の図書館から借用してくれたものを使用した。

私は、練兵組に入り熱中した。ある日、大演習に参加し、銃の操作を誤り、将校を負傷させてしまった。一時は、父から切腹の覚悟をしておくように言われた。幸い、傷が浅かつたこともあり切腹には至らずにすんだ。

明治二（一八六九）年（十三才）

この年より、文武館が設置された。武館で撃剣をやり始めたが、時代遅れと感じ二ヶ月ほどで止め、文館での勉強に専念した。数学科が出来て出席してみたが、算盤をはじめされ、無意義に思え、この授業には二度と出席しなかった。小笠原流の礼式を習い、日本書紀の講義を聞く。長崎からは、英語の教師が招聘されていたが、風采が尋常でなく、毫も士君子の風がないので、英語学に対し敬意を払えなかつた。

明治三（一八七〇）年（十四才）

この年の春は、専ら文館において漢籍を読んだ。左伝、史記などを読み、孟子の解釈に心がけ、中野先生という老人に孟子の講義をしてもらつた。夏には、父とともに専ら海漁に励み、もし家禄がなくなつても漁師としてやっていけると考えて、これを隣家の主人に話したところ微笑していた。

暮れには、一学友に誘われ池辺藤左衛門に入門。池辺先生は横井小楠の弟子であり、肥後学（実学）であり、柳川藩では改革者であり、大伯父・父からは恐れられていた。池辺先生からは外史を習つたが、先生の教育・指導は、これまでのものと異なり、識見が生き生きとしていた。また、先生の所には、英学者も出入りしていた。私も英語を始めたい気になり、父に歎願し、漢学に加えて英語を勉強する許可を得た。

明治四（一八七一）年（十五才）

私は、早々に英学を開始した。英学校は、文館より独立して長久寺に設置されていた。寄宿舎に入つたが、年長者ばかりで、文明人という名の下に風紀は乱れていた。私の父は、極めて保守的であり、古武士である。父の厳格な古武士風は、私を文明人の奔放より救い保護してくれた。

この学校では、英語と数学が教えられたが、両科とも最優秀の成績であった。特に英語の吉村先生（静岡の人）が、「海老名は将来有望である」と言つてゐるのを間接的に聞き、心密かに喜び励みとした。

吉村先生の送別会に、学友たちと城堀の禁漁の鯉を捕獲し、父兄とともに謹慎となる。父は生涯で初めての謹慎で歎く。しばらくして謹慎と禁魚も解かれた。

英語教師はいなくなり、学校も休業となる。生徒たちは、東京への遊学を願つたが、文部省は藩からの官費生を認めなかつたので、各自私費でそれぞれの遊学先を探すしかなかつた。父が、遠くへの遊学を許可しないことを知つていたのと、たまたま熊本に洋学校が開学したことを知り、私は熊本行きを決心し、父の許可を得た。

明治五（一八七二）年（十六才）

旧正月に池辺先生の紹介状をもらい、熊本に行き、竹崎茶堂先生を本山に訪問。先生は、病院に入院していた。金森通倫君が私を病院に案内してくれた。先生は、病院で私を見し、洋学校入学試験の許可を与えた。

入学試験は、二人の先生の前で、左伝と史記を朗誦することであつた。この試験に合格。九月に正式に入学するまで、洋学校附属の属邸で漢学を修めることに決まる。直ちに柳川に帰り出直することにした。

熊本に再度出発しようとしている矢先、一月十八日夜八時頃柳川城が火事により焼失。これは藩の滅亡に等しい出来

事であったので、一、二日出発を見合せた後に、熊本に行く。熊本では、最初竹崎先生の家塾に入り、しばらくして属邸に移つた。

熊本滞在中に、両親により全く見知らぬ女性と婚約させられる。しかし、翌年破棄となる。また、この年に家督相続をした。

九月になり、熊本洋学校二期生として入学。私は、初めて外国人を見、接し、教えられた。この年の入学生は七十二名であつたかと思う。教師は、毎週行つた英語の発音とスペルの試験により、次々と三十名ほど落第させた。月曜から土曜の午前まで洋学校での勉強。土曜の午後か日曜は、漢学を自主的に習つた。洋学校では、最初の一年間は漢学の授業もあつたが、二年目からは廃止されていた。

明治六（一八七三）年（十七才）

この年の前半期は、スペルの暗誦と綴方を覚えた。この練習でアクセントだけは確実になつた。この後、読本を読み始めた。西洋人にもまた人情・道徳心があることを発見し別世界を発見する心地がした。間もなく文法も学び始めた。

私は、日曜の午前はほとんど欠席することなく、茶堂先生の大学または論語の講習に列席した。また、小楠の実学に深い関心を寄せていた同級生乾立夫の指導・影響を受け、親・家庭中心の思想から、国家を中心とする思想になつた。初夏には、国に一身を奉げ、天皇を主君とする、愛国主義に生きることを新たに決心する。

一年次を終えて、夏休みとなり帰省する時、ジェーンズ先生に暇乞に行つた。先生は私を見て one of the wonders of the school と言われた。一種の怪訝と恐縮と希望の気分に打たれ、別れたのである。

帰省すると、父は私の様子が変わつており、心配を始め、熊本留学を阻止しようと考へ始めた。幸いにして事なく

夏を過ぎし、熊本に戻ることが出来た。

二年次が始まり、英書講読に加えて、地理・数理を習う。秋には、毎週土曜夜ジエーンズ宅で始まつた有志による英語の聖書輪読会に参加した。

明治七（一八七四）年（十八才）

第二学年も勉学の方は順調であつたが、学校内では風紀問題が起つた。熊本は男色が盛んで、洋学校生徒も土曜・日曜に自宅に帰る時は父兄が同伴するのが常であり、学内では男色は厳禁であつた。ところが、寮長の一人が男色の嫌疑を受けた。彼は学業成績優秀の一人でいつも上席を占めていた。彼は、男色罪を犯した。ジエーンズ先生は彼を信任していた。彼は退学処分となるべきであるが、ジエーンズ先生の信任厚く、先生は断じて学生の罪を信じない。故に学校当局は困惑した。

学生も硬・軟二派に分かれた。私は硬派に属していた。一日、竹崎茶堂先生の講習会に出席した時、先生は学校当局に同情されたのであろう、いつもに似合わず不徹底論を立てた。余りに事理明白なのに、不徹底な言葉をもつて私たち硬派学生を諭そうとされたので、私は冷笑した。先生は、真っ赤になつて腹を立て、出入りを断ると言われた。私も余りに馬鹿々々しく思い、再び先生の門に出入りしなかつた。さらに痛嘆する出来事があった。乾立夫が隠れて禁止の煙草を吸つていたと見え、寝床より失火騒ぎを起こした。私は、この失態を見て、乾立夫とは絶交の姿となつた。

私が、茶堂先生と離れ、また乾立夫と別れたことは、苦痛は苦痛であったが、自立獨行の決心となつた。

二年次を終えて帰省し、例年の如く家事手伝いをしていた。一日、父はうちくつろいだ様子で、学校を終えたら何処かに出て、更に勉強したいだらうと尋ねた。私は何心なく、機会があればアメリカにでも行きたいものだと答えた。

すると父は、態度を改め、そうだろうそれがお前の本心だろう。洋学校行きは止めよ。もう熊本に行くことは許可しない。全力を尽して反対する。もし聞かなければ、死んでたたると満身の熱誠を注いで叱咤した。

私はこれに対しても抵抗は出来ない。恐ろしくもあるし、氣の毒である。万感一時にほとばしり来て、どうすることも出来なかつた。私は、洋学を止めますと答えた。それから、一室に入り、また外に出て熟考した。洋学は廃しても、愛国心はやまない。愛国心が燃える以上、最早私は家庭人ではない。慈父の意のままに、家庭人として終生朽ちはてる訳には行かない。國に奉仕出来ないので、生きる甲斐がない。

二日後に、大決心と勇気をもつて父に向かい、先日は洋学を廃止すると申し上げたが、さらに考慮に考慮を重ねた結果、どうしても洋学を廃止することは出来ないので、何とか許可して欲しいと懇願した。父は一度廃止すると言ひながら、それを取り消すとはけしからん。百両やるから、隠居して出て行けと言う。

結局、叔父の仲介などもあり、學費は出さないがそれでも行きたいなら、ということで再び熊本に向う。成績優秀といふことで、學費を免除してもらい、さらに祖母（実母の母）から小遣として毎月一円を受けることになる。

第三学年では、物理学・幾何学を学ぶ。物理学で音の振動数について学び、人間の耳が聞く音は限られている。それではそれ以外の音は誰が聞くのであろうかと考え、神秘の世界に興味を持ち始める。

この頃、ある朝洗面所において、山崎為徳が偶然 God はあるようであると言つた。小崎弘道は、直ちに何 God の存在？ 山崎黙して去る。その後誰も God の語を言わない。しかし私も密かに考えかかつて居た。時々、心に浮かび来た問題である。茶堂先生が、朱子は天は即ち理なりと言つたが、小楠先生は理なりでは足らない。天は活きてていると言わされたと語られたことなど思い、この問題は混沌として、我々の頭脳を往来し始めた。私は、聖賢の所謂天は耶蘇教の

God に似通う思想のように考え始めた。

聖書は、はたして信じるに足るか。キリストは、はたして神の子か。これらの問題が、私の心を襲い始めた。

この年の冬休暇には、帰省したくなかった。しかし、父の心情を察し帰省した。父は喜んでくれた。あるだけの心を尽くして父の手伝いをし、父を慰めようとした。

明治八（一八七五）年（十九才）

正月元旦に年始の礼式を済ませ、朝早く出発しようと、先ず父に暇乞した。父は庭に出て箒で掃除をしていた。私は草鞋をはき、土下座して暇乞した。私は未だ嘗て聞かなかつた恐ろしい言葉を聞いた。親不孝者。これが父の別れの言葉であった。

私は、この不孝の苦痛のほかに宗教問題に悩み始めた。神の実在と聖書の信すべき理由、基督教の儒教に優ると思う理由は、一通り呑み込めた。結局、祈祷が問題となつた。祈祷は破廉恥であると考えていたからである。

二月の或土曜の夜、同級生十名ほどとともにジェーンズ宅での聖書輪読会に出席した。いつもは、先生だけが祈祷したが、この夜に限り Let us pray, stand up. と言つた。私は、面食らつて為す所を知らない。祈祷の意義が理解でき立つことには躊躇したものの、師の言葉に従い起立してジェーンズ先生の祈りを聞いた。この夜ジェーンズ先生は、今夜は祈祷について話したいと言ひつつ、最も厳格なる態度をもつて語られた。祈祷は、第一に創造者に対する被造者の義務であり、職分であると言われた。第二には、神との交わりである。第三には、求めである、と。

私は、第三の意義には共鳴できなかつたが、第一・第二の祈祷が神への職分であり、交わりであるという言葉に共鳴を覚えた。私は、目覚めた如く、全く別人となつた。神と私との間に電線がかかつた。自己中心から神中心となつた。

私の良心は、その主権を取り返すことができた。善道を行くことが極めて自然的になつた。向上的道が坦々として開けた。新しく生まれるというのは、これをいうのかと思つた。

室に帰つて、初めて祈つた。黙祷ではあつたが、同室の人がお祈りでしたか、と言つた。私は、瞬間に別人となつた。これは私の誕生である。

漸く花が咲くころとなり、ジエーンズ先生は、私に言う。山崎大尉という人が来て、日曜日の礼拝を始めたいと言うが、次の日曜日午前九時、来会したい者を連れて來いと。私は驚いた。先生は、どうして私を招いたのか。

私は、下村孝太郎、由布武三郎を伴つて先生宅に至る。山崎大尉に面会する。ジエーンズ先生は、讃美歌を歌い、祈祷をなし、聖書を読み、説教をなし、祈祷し、讃美歌を歌つて散会した。

寄宿舎に帰ると、宮川経輝が自分も行くから次回には召んでくれと。横井時雄も同伴しようという。山崎為徳も同伴すると申し込む。市原盛宏も来るという。大議論をする覚悟であったが、何を知らん、彼等は同信の人々であった。

金森通倫、小崎弘道の二人は、この驚くべき嘆ずべき状態を見て、茶堂先生を訪問し、この慨嘆すべき有様を告げた。茶堂先生は、最早どうすることもできないが、汝ら二人に信頼する。堯舜の道は汝らの肩にありと言われ、二人は大に任じて帰校した。しかしその後間もなく、金森は入信した。

日曜の礼拝は、次第々々にその高調を加え、午後には花岡山に登り、議論し信仰の熱を加えた。

日々の授業は、物理学、化学で、科学の方面より神の実在を認められることを見出し、益々信仰の根拠を深くするに至つた。

三年次を終了した夏休みには、帰省せず熊本に滞在していたが、父が心配していると聞き、一寸帰省し、父を喜ばせ

て、直ちに熊本に帰つて來た。父が私を愛する熱情は、私をその身邊に置きたいのである。私の飛躍を恐れるのである。熊本留学もはや三年を過ぎた。残りは一年となつた。故に父の心配も大に落着き、卒業の日を待つようになつた。しかし、私の心中を明かすことのできない苦痛は依然として残つて居る。私はクリスチヤンになつたことは言えない。父とは距離が遠くなるばかりである。

四年になると、集会は盛になり、毎夜校内で聖書研究が行われた。ジェーンズ先生も熱心になり、毎土曜夜祈祷会を始めた。

明治八年の春、一時に信仰の花が咲き始めた時は、十名にも足らなかつた。秋にはリバイバルとなり、数十名の信者になつた。この信仰は、知友に相談して養成したものではない。各自相知らせずに、独特に経験したものである。これはジェーンズ先生から、特に誘導されたとも言えない。各自が密かに思慮した所である。

四年では、化学・天文学を学ぶ。

明治九（一八七六）年（二十才）

正月初旬の観兵式を見に行つた。朝日に輝く剣とサーベルの光、馬上の将校の意氣揚揚たる風姿。私の生来の武士根性は勃然として沸騰した。我が祖先伝來の武士生涯を去り、僧侶生活に入ろうとしている。全く茫然自失の心状に陥り、三日間茫然として過ぎた。漸く覚醒して自己に帰り、危なかつた。武士の功名心に縛られるところであつた。私は、幸いにもこの誘惑より免れた。

さて、日一日と増加する求道者と改宗者を如何にすべきかが問題となつて來た。ジェーンズ先生も、漸く一種の Association の必要を感じられた。ここにおいて一宣言書を発し、同志を糾合することにした。これが花岡山の誓言と

なつたのである。私は文章が出来なかつた。宣言書（奉教趣意書）は、その時の指導者であつた海老名、横井、宮川、市原、金森の考案によらず、古莊三郎、坂井禎甫らが書いたものである。洋学校の趣味よりも、国漢学者の趣味が余計に見えて居る。けれども、その敬神と愛國との精神は、我々が中心から同意した所のものである。

この花岡山の宣言は、全く誤解された。否誤用されたというのが至当である。何等政治上に関係ないのに、共和政治主義の発表と言いふらされた。我々の宣言は、宗教道徳の簡単な宣言である。基督教攻撃は、政治的見地より攻撃の矢を放ち、クリスチャンは国体を破壊する者としたのである。

熊本人学生は悉皆自宅に召戻され、父兄親類より改心を強制された。年少者三、四名のほかは改心しなかつた。金森と横井とが、頑強なる反対を受け、結局迫害となつた。横井は小楠先生の嫡男であり、金森は茶堂先生に深い関係ある家の次男であつたからである。金森は遠くの親戚宅に隔離され、聖書など基督教関係の書物も全てとりあげられた。かろうじて、フンドシの中にヨハネ伝の小冊子を忍ばせて、ひそかにこれを読んで耐えた。

横井の場合は、父・小楠が基督教の嫌疑で暗殺されただけに、母・親戚・小楠の弟子たちから、猛反対を受けた。一時は、母が自害するかもしぬないと言う危機もあつたが、小楠の高弟である太田黒により、信仰は心中のことなので、周囲がとやかくいう問題でないから、本人の意志に任せようとの仲裁があり、事なきを得て、帝大に進学することになつた。

金森も、家族が折れ、宇治にお茶の栽培の勉強に行くという名目で京都に行くことになつた。

当時伝道者として我々の心を動かしつつあつた人物は、ジョン・バニヤンとムーディであつた。彼等はともに神学校を通過していない。ただ聖書を熟読し天来のインスピレーションを受けて、有力な伝道者となつた。かえつて神学校に

学んだ人は有力ではない。私は如何にすべきか。一身上の一大事なので、一夜ジェーンズ先生を訪問して相談した。

先生は言う。最も秀でた大工は、最も秀でた道具を要する。神の道具たらんとする者は、最も優秀なる者とならねばならぬ。足下の如きその精神の道具たり得ると思うは傲慢である。さらに語を続け、ルーテルも神学研究には二十年を要した。カルヴァンも同様である。バニヤンの如き、無学と思うわ誤解の甚だしいものである。当時彼くらい聖書をよく読んだ者はなかつたろう。ムーディの如きも、今日あるのは十五年の準備を要したのである。足下大に修養研学して準備をなせ。しかし、断じて書物の虫となるな。大軍を指揮して戦争する大将の精神と態度とで勉強せよ、と。この言葉により、私の数ヶ月の煩悶は氷解し、喜んで寄宿舎に帰つた。小崎弘道もこの頃入信した。

まもなく、洗礼問題が起きた。洗礼式は必要ないというのが、学生一般の輿論である。我々は既に聖靈の恩化に浴し、新生の経験を有しているので、洗礼の必要を感じない。

私は思惟した。洗礼はたして基督教会の習慣として見れば、これを放棄するのは必ずしも賢明な道ではない。信仰のためには洗礼は必要ない。洗礼は人の救い、不救いには関係ない。しかし、教会の習慣法という点からすれば必要であろう。今後、我々が洗礼を受けない理由を世界中に言訳して行くことは、實に馬鹿々々しい。洗礼を受けておれば、何等の文句なし、世界が渡れる。よつて、洗礼は受け方方が良いと論断した。

ジェーンズ先生は、我々が洗礼問題を討議しているのを知つてか、我々の知らない内にデーヴィス宣教師に書簡を送り相談していた。先生自身は、改革派の信徒であり、当長崎には改革派の宣教師スタウトがいたが、彼には相談しなかつた。なぜなら、ジェーンズ先生は、日本に宗派を持ち込むのを嫌い、無宗派主義を主張していたアメリカン・ボーナードのデーヴィスに相談し、学生の洗礼を依頼したのである。しかし、京都在住のデーヴィスは、熊本まで授洗のため来

る余裕がなく、ジエーンズが洗礼を授けるようにアドバイスをした。彼はこの言葉に従い、学生たちに洗礼を受けた。

学生たちは、ジエーンズ先生から洗礼を受けたことを喜んだ。

洗礼式において、我々はクリスチャンネームをつけた。小崎は新参のためか謙遜してヘンリーと名づけた。宮川はステパンと名乗った。最初の殉教者になるとの底意があつたと思う。私はヤコブを名乗った。筆頭の弟子ペテロを名乗るのは不遜と考え、二番弟子で、しかも使徒中最初の殉教者であるが故に、心密かに彼に擬したのである。

この受洗式で、前年来の精神運動は終結し、我々第二年に入学した者は、卒業証書を受けて去つた。洋学校を葬り去る心地がした。

ジエーンズ先生は、春頃から卒業後の進路として、京都に設立された同志社を紹介していた。学生たちは、校長の新島襄先生に書簡を送り、その中で同志社が宗派主義か合同主義かを質問した。新島先生からは無宗派主義との回答があつたので、同志社を進学先に選んだ。

私が、卒業後ジエーンズ先生に別を告げて、柳川に帰つたのは七月下旬であつた。

私は、父より研学を許して貰はねばならない。相談する好機を伺い、日々家業を助け、畠もすれば、米つきもする。投網の修繕をもするなどあらゆることをして家業を助けた。一日雨天で父は引籠もり、投網を修繕して居た。私も手伝つていたが、父は何心なく私に向かつて、このように尋常に家業の手伝いをしているが、東京に上り更に研究を続けたい底意を有するのだろうと言われた。私は機会を待つこと実に一ヶ月を過ぎていた。胸中苦痛に耐え兼ねていたので、東京までは申しませぬ、その半分の旅程にあたる京都まで遣つて頂きたいと歎願した。

父は自分の方から言い出してしまつた。取り消しは出来ないということで、許可してくれた。父から五円、叔父・祖

母から四円を錢別に貰い、船で大阪に向う。船賃は三円五十銭であつた。

同志社に到着したのは九月中旬で、熊本より三十名ばかり来集しており、授業は既に始まつていた。私は、新島先生の四福音書の調和の組に入った。希望の科目ではあつたが、先生は英語を日本語に訳させて教えて居るには失望した。

デーヴィス先生の詩篇の組に入る。英語の詩篇を日本語に訳させて教えて居る。先生は日本語をよくご存知ない。私は失望した。ドゥーン先生の創世記研究が加わつた。先生は世界の創造は紀元前四〇〇四年という。到底話にならぬ。

我々は、同志社の先生には尊敬を払う訳には行かぬ。一ヶ月経つか経たない内に、熊本より來た我々の間に不平は鳴らされ始めた。

時にジェーンズ先生は、熊本の奉職年限を終わり、大阪の外国语学校に赴任し、同志社を訪問した。我々一同先生を待ちこがれていた。デーヴィス先生宅で面会した。我々は同志社に対する不満を述べた。先生はデーヴィスと相談して見ようと言われ、我々は満足の意を表した。先生は言られた。不完全な学校にも良いことがある。教科書の選択は自由である、また勝手に自修することも出来る。貴下らは創業者を忘れてはならない、と。ジェーンズ先生は、デーヴィス先生と協議し、授業上大に改善すべき所を認めさせ、これによつて学則なども改定された。

私にとつては、学科の準備は殆ど無用であつたので、専ら読書に励んだ。同志社での一学期は無事終了した。この年の暮れ、学生が三部に分かれ、校外に三個の教会を設立した。私は十二月十日平安教会の前身である第三公会を設立した。そして長老に選ばれた。熊本バンドが三つに分かれて教会を設立したことは、宣教師らの驚きであつた。

明治十（一八七七）年（二十一才）

四月下旬、ジェーンズ先生の長男が大患と聞き、大阪に見舞に行く。数日家事を手伝う。別れるに際し、先生と談論

つきない。将来の事に話が及び、私はさらに神学研究をした後で、伝道に従事する予定である旨告げたところ、先生は態度を一変し、知識・神学研究を批判し、バニヤンの天路歴程を読めと言われる。私の頭は全くかき乱された。一年前には神学研究を勧められ、今全く正反対に知識の要求を打止められた。帰校して天路歴程を読んでみたが、最早興味がない。約二ヶ月後、ジエーンズ先生は帰国された。

夏休みとなり、同級生は皆夏期伝道に行くことを決心した。小崎は彦根、森田は岸和田、吉田は高知、金森は岡山、宮川は大阪、などである。私は独り閑部の地に引っ込み読書修養の心つもりでいた。ある日新島先生が来て言う。海老名さん、上州安中より伝道師を招いて来た。旅費は出すと言います。誰か行く人はありませんか。先生、皆それぞれ行く所が定まりました。行かなくてならないのなら、私のほかはありません。貴下が行つて下さるならば、この上はありません。神の召とあらば行くよりほかはありませんと確答した。

私は安中に行つて何をするべきかを考えた。聖書はマタイ伝を講義することにしたが、私の生涯に一大転機が来た。私はクラスにおいては自由に論断した、注解書のようなものも顧慮しなかつた。しかし、安中では私は民衆救済のため基督教を説かなければならぬ。もし誤ったことを説いたら衆人をあやまらせることになる。私はその責任の重大に辟易し、かつてない慎重の態度を取らねばならなくなつた。それゆえ、なるべく自説を述べないように覺悟した。米国多数人の信依するバーンズの注解書に依頼することにした。これが私をして、権威に服従する出発点であつた。

安中は、明治七年暮れ、新島先生が帰朝後直ちにその父母を見舞つた所である。新島先生は板倉藩の出身であるが、江戸で生まれ育つたので、はたしてそれまでに安中に来られたことがあるのかどうかは知らない。先生は、安中を訪問された時に、方々で講演をされ、また多くの聖書を送られた。その結果として、湯浅治郎氏などを中心に毎日曜日集会

して聖書を読んでいたという。

私が安中に到着するや、湯浅氏ら六名の中心人物だけでなく、約五十人ほどの人々が挨拶に来た。滞在中には、数箇所でマタイ伝の講義をなし、求道者は四十名に達した。私は、安中では四十才内外であるように見られた。

私が帰った後も、四十名は毎日曜日集会を継続していた。

明治十一（一八七八）年（二十二才）

ある日、新島先生が来て、東京の長老派から安中に伝道に行つてもよいかと私に手紙がきたがどうしたらよいだろうか、との相談があつた。私は、安中は東京に近いので、宗派などにはこだわらず、東京の長老派に一任したらよいのでは、と答えた。新島先生もそれに賛成し、東京と安中にその旨便りをした。ところが、安中からは新島先生に、我々を孤児にするつもりかななど、悲痛極る書簡が寄せられた。先生は、同藩人の声ではあるし、窮境に陥つた。

結局、私が学業中であつたが二月中旬に安中に行き、伝道活動に従事した。一ヶ月して、まさに京都に帰ろうとした時に、新島先生から校用で東京に行くので、必要ならば安中に行つても良いとの申し出を受けた。そこで、先生に来てもらい二月三十日夜に洗礼式を執行した。三十名が受洗、安中教会を設立し、私はこの教会の牧師としてさらに三ヶ月間滞在し、市原盛宏と交代した。

七月に、基督教徒大親睦会が東京で開催された。私は安中教会代表として、浴衣・兵児帯姿で大演説者の一人として演説した。この会は、多少異論も行き違ひもあつたようだが、大体においては諸教派の親睦には、深甚のインスピレー ションがあつた。

大会が終つて、市原は安中へ、私は東海道を通つて京都に帰つた。京都では比叡山に避暑するグーデー女教師の日本

語の先生となり、八瀬より毎日通つた。粗食・疲労・過労の結果、視力が衰弱し始め、秋にはさらに悪化した。テーラー宣教医や日本人医師にも診断して貰つたが、非常に衰弱しているので、失明の恐れがあるとまで宣告された。

私は、生來の欲望に加え、武士の功名心を鼓吹した父母の感化をうけた事甚大であつた。これに加え激烈な愛国心の勃発以来政治的欲望は強烈となつた。しかし、その後基督教信者となり、この強烈な二大欲望と戦い、全然これを放棄することができた。以来、神に奉仕することを第一とし、日本の基督教化の一ことに集中したのである。そして、この欲望を貫徹するためには相当の知識が必要と考え、知識そのものを欲求するようになった。教化力と知識力との欲求は、私の全部を支配したのである。しかし、視力の衰弱は、私をして知識を得る道を失わせた。

視力を失うことは、知識を得る道がなくなることである。そして、それは自分が無用の僕となることである。

教化の使命を任じ、知識欲に燃えていた時は、邪念妄想などなかつたが、この欲望が空虚となると性欲・怨恨・失望・愚痴・不平不満が雨後の筈のように発生して來た。私は落伍者である、大望を捨てて、田舎の一農夫となるべきかといい悩んだ。

神は、私が知恵の人であることを求めない。功労多い忠僕であることを求めない。無能無力無知の赤子であることを私に求めている。私は果たして、この赤子たり得るか。この一片の赤心に神の赤子を見出すことが出来る。

当時大宮御所は、人の出入りを許していた。私は折々散歩に行つた。時は、十一月の下旬。御所の中、櫻の下を徘徊し瞑想し、苦悶し、無学、無識、無能の赤子たらんと欲して決心するを得ず、起ちつ、伏しつ煩悶した。あたかもゲッセマネの光景であつた。この時に始めて、主のゲッセマネの祈りを捧げ、私は十字架にかけられ、神の赤子として私は

誕生した。

明治八年春の一夜、ジエーンズ宅において神の忠僕は生まれた。日本の武士が、神の忠僕となつた。そして、明治十一年の秋、大宮御所の櫻の落葉の上、神の赤子は呱々の声をあげた。實に難産であつた。

おわりに

海老名自筆の自伝・回想録十一點については、吉馴明子氏が『海老名彈正の政治思想』（東京大学出版会、一九八二年）で言及され、一部引用もされているが、何といつても海老名の死後翌年に渡瀬常吉の編・著によつて出された『海老名彈正先生』（龍吟社、一九三八年）において、多量に引用されていることが注目される。今日においても、同書が海老名研究の第一級の資料としての価値をもつてゐるのは、まさに海老名自筆の自伝・回想録を多く使用していることによるのである。ただ、多量に引用されているものの、まだ活字化されていない部分も多く、また海老名の死後間もない頃であり、関係者も多く生存しており、やむを得なかつたことは思うが、渡瀬の判断で都合の悪いところは削除された部分も少なからずある。

例えば、海老名が安中教会牧師に就任し挨拶を受けた時のこと�이引用されているが、この式の後、海老名が新島とともに散歩して、新島が安中教会は「アナタへ月々拾円を呈することになりました。若し残つたら貯蓄なさつたらよからうといはれた。私は甚だ不快であつて、軽くハイといつたのみ。何ともいはなかつた。万事を投げ打つて牧師となつた。（中略）貯蓄とは何事ぞ、俸給は何程でもよい、多額を欲するなら牧師にならない。貯蓄などは以外のこと、

きたなしと、心中甚だ快くなかった」（「回想録」第三巻、三十九頁）の箇所は引用されていない。

自伝・回想録は全て六十代以後に記されたものと思われる。生涯の記述も四十一歳から四十三才の三年間の『略年譜II』を除いては、三十代前半までのものと偏っているが、海老名研究には欠かせないものであり、筆者も今後さらに全容の解明に努めたいと考えている。

注

「自伝的略年譜I」の執筆年と原史料について

一八七七年、同志社の学生時代に夏期伝道で安中教会に行く途中、神戸教会で説教した。この時に「Miss Barrows」に初めて会したが、娘の歯並の揃つて美しい面持は、娘が八十才にならるる、毫も変化のなかつたやうに何時見ても同一の美貌に打たれた」（「自伝的略年譜I」一〇一頁）と記されてゐる。【キリスト教大事典】によると、バロース Barrows, Martha Jane (一八四一一九二一五)。一八七六年來日。一九一四年十一月帰國、ハーヴィング、これを基に計算するとバロース八十才（数え年）は、一九一〇年頃となる。

自伝・回想録関係十一点の原史料は、「お茶の水図書館」から同志社人文研に寄贈されたものには含まれていない。「お茶の水図書館」に寄贈された時点では、リストはあるが、未贈となつてゐる。今回の執筆にあたつては、同志社人文研究所蔵の紙焼き史料を使用した。